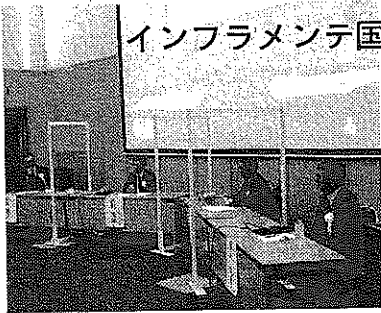


インフラメンテ国民会議フォーラム



DXの将来像を共有

安全・安心・豊かな未来へ

インフラメンテナンス国民会議九州フォーラム（リーダー・日野伸一九州大名誉教授）は26日、福岡市の福岡国際会議場で第5回ピッチイベントを開いた。写真。「インフラDXが創り出す安全・安心・豊かな未来社会」をテーマに、講演やパネルディスカッションを通して、DX（デジタルトランスフォーメーション）の最新の動向や導入による建設業の将来像などを議論・共有した。ピッチイベントは2部構成。一通省総合政策局の木村康博公となり、第1部では、「国土交」共事業企画調整課事業総括調

整官が国土交省のDXの取り組み、福岡県の杉本直也交通基盤部政策管理局建設政策課イノベーション推進班長が「VIRTUAL SHIZUOKA」、建設ITジャーナリストの家人龍太イエイリ・ラボ代表がメンテナンス現場の活用状況について講演した。2部は、ツタワルドボクの片山英資代表理事をファシリテーターに、講演した3氏によるパネルディスカッションとした。

杉本氏は、これまでの3次元データの蓄積により、ことし7月の熱海市の土砂災害の被害状況をわずか3日で把握した事例を紹介した。中心になったのは有志による「静岡県群サポートチーム」で、オープンデータがそれを可能にしたとして、DXがもたらす新しい災害対応の姿を示した。

家人氏はDXにより「移動や雑用が減る。本来、技術者に求められる判断、計画作成の作業に集中でき、仕事の質は上がる」と強調した。木村氏は、「DXによる仮想空間の創出は公共事業において説明能力を高めるツールになる」と期待。また、メンテナンスについて「新しい産業分野だ。ベンチャーなどが参入し、建設業と融合して市場を広げてほしい」とした。一方、デジタルネイティブの若手技術者に対する技術伝承が課題として挙げられ、現場が疎遠になることや省人化によるコミュニケーションの希薄化などの問題意識が共有された。次回の第6回ピッチイベントは22年2月に長崎で開く予定だ。